

中核症状と認知症の行動・心理症状（BPSD）

認知症の症状には、誰にでも生じる共通の症状としての「**中核症状**」と、中核症状に環境などさまざまな要因が加わって二次的に生じる「**認知症の行動・心理症状（BPSD）**」があります。

「認知症の行動・心理症状（BPSD）」は必ずしも生じるものではありません。
また、認知症に影響されていない「**健康な部分**」もあることを忘れないでください。

中核症状（認知症の共通の症状の例）

- 記憶障害：夕食を食べたことを忘れる、最近のエピソードをすっかり忘れてしまうなど
- 失語：言葉が出てこない、言葉の意味を理解できない
- 失行：服の着方がわからない、道具の使い方がわからない
- 失認：視力は問題ないのに目の前にある物が何かわからない、文字盤の時計が読めない
- 見当識障害：時間がわからない、季節感のない服を着る、近所で迷子になる、友人や家族の顔が認識できないなど
- 実行機能障害：料理などの段取りがたてられない

認知症に影響されていない健康な部分

- * 昔のこと、体で覚えたことは覚えている。
- * 五感や情緒は豊かに生きている。



※この図は、アルツハイマー型認知症を中心とした考え方です。

※ BPSD : Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia

認知症は高齢者だけの病気ではありません。

65歳未満の世代に発症した認知症のことを「**若年性認知症**」といいます。

若年性認知症は、働き盛りや家庭で大きな役割を担う世代の人に発症し、社会生活・家庭生活への影響が大きいことから、高齢者の認知症とは違った様々な支援が必要です。

《若年性認知症支援ハンドブック》

大阪府のホームページからダウンロードできます。

大阪府 若年性認知症支援ハンドブック [検索](#)

